

◆ 巻頭言

ハノイの希望

池田 香代子

ハノイでバイクに乗っているのは、ほとんどが若い女同士、男同士、恋人同士だ。子どもを前に1人、自分たちの間に1人乗せた若夫婦も目につく。そんなバイクが雲霞の大群のように、早朝から深夜まで道を埋めつくして猛スピードで流れていく。行く手に彼らが見ているのは、今日よりも豊かな明日だ。

ベトナムは今、「二人っ子政策」の普及に躍起だ。

「出生率2では人口が減りませんか？」

ハノイ市の保健部責任者にきいてみた。

「ベトナムではこれがちょうどいいのです」

つまり、法律の徹底を最初から期待していないらしい。政府がいくら喧伝しても2人以上産む人はいるから、人口は微増し続ける、というわけだ。いい意味でのいい加減さ。ベトナムは不思議な社会主義国だ。

アジアのご多分に漏れず、女性はよく働く。フランス統治下に根づいたカフェ文化のせいもあるのか、男たちは昼間から歩道に出された椅子に陣取ってビールなど飲んでいる。それを尻目に、女性たちは朝早くから高麗鼠のように働く。街の果物売りは、深夜1時から仕入れに忙しい。エイズ予防についても、女性のほうがまじめだ。これでは、男女の社会的地位が逆転するのも近いのでは、と思うのだが、そうでもないのがアジアなのだろう。

働いても働いても、学んでも学んでも、なぜかいつまでもアジアの女性の地位は低い。ベトナムの男女出生比は112対100という不自然な数値を示す。これほどの人権無視はない。なにしろ命を拒まれているのだから。

けれど、ベトナムの男性には女性性も感じた。これはアジア随一かも知れない。女性の学歴も上がりつつある。これらが相俟って、そこに何らかの政策がうまく働けば、女性の人権が軽んじられる人類の歴史は終焉するかも知れない。そんな希望を、若いハノイに見た。



PROFILE

池田 香代子
(いけだ かよこ)

1948年、東京生まれ。ドイツ文学翻訳家、口承文芸研究家。9.11とアフガン報復攻撃を受けて出版した『世界がもし100人の村だったら』の印税で立ちあげた「100人村基金」で、NGOや日本国内の難民申請者の支援をしている。世界平和アピール七人委員会メンバー。ESD-J「国連持続可能な開発のための教育の10年」推進会議顧問。